膵臓がん 早期発見に力

粘り強さは今も重要

帯広市医師会が2018年に開始した「膵臓（すいぞう）がん早期診断プロジェクト」。同疾患で死亡する患者が全国平均を大きく上回る十勝で、一人でも多くの命を救うための取り組みだ。プロジェクトに参加し、キーマンの一人として活躍する北斗病院の河瀬智哉医師（40）は、15年に岡山県から十勝にやって来た専門家。長年、膵がんと戦い続ける河瀬医師に、オール十勝で現状を打開するための課題を聞いた。（奥野秀康）

たうんトーク

恩師の死と後悔

―膵臓がんが、怖い病気と言われる理由は。

早期発見が難しく、見つかった時には進行がんになっているケースが多い。2000年代初頭に「ジェムザール」という抗がん剤が出てくるまでは「見つかったら諦めるしかない病」と考えられてきた。

―膵がんに関わることになったきっかけは。

昔、自分を医師の道に進ませてくれた恩師が膵がんにかかり、診断後3カ月で亡くなってしまった。先生が病気になった時、自分は何もできなかった。その後悔から、この分野に進んだが、今も「どうすれば早期発見できるのか」という闘いが続いている。

―出身地の中国地方から十勝にやって来た。

北斗が肝胆膵の内視鏡を扱える専門医を探していて、声が掛かった。十勝が膵がんに悩まされている地域だと知ったのは、こちらに来てから。膵がんの早期発見に挑んできた自分にとって、仕事のやりがいがある場所だと感じている。

患者症例を活用

―市医師会のプロジェクトとは。

地域のかかりつけ医から膵がんのリスクを持つ患者を連携病院（帯広厚生、帯広協会、北斗、帯広第一、清水日本赤十字、黒澤）に紹介してもらい、患者には定期的に検査を受けてもらっている。初年度は624件の症例を集め、膵がんを34件発見した。

―具体的な検査の内容は。

CT（コンピューター断層撮影）、MRI（磁気共鳴画像装置）、超音波検査を年に1回ずつ、4カ月おきに受けてもらうことにしている。患者の皆さんには通院の手間や精神的な負担が掛かってしまうかもしれないが、過去には検査を5年間続け、最後の検査で見つかった事例もある。

―先端研究でも、問題が解決する可能性はないのか。

5年ほど前の論文で、膵がんになる人は20～30年前から遺伝子異常が始まっているという報告があった。ただ、実際に画像検査で予兆が現れるのは発症の半年～1年前。遺伝子レベルでリスクが分かっても、いつ発症するかは分からない。とにかく根気が重要なので、患者の皆さんにも理解を頂ければと思う。

―プロジェクトの今後の方向性は。

膵がんの見つけ方は基本的に昔と変わっていないので、やはり粘り強さが重要だ。患者に直摯（しんし）に向き合い、膵がんを発見することに必死に取り組み続け、一人でも多くの命を救うことができればと考えている。

異変を見逃さない根気強い取り組みが続く

北斗病院消化器センター副部長

河瀬智哉さん

かわせ・ともや　1978年生まれ。広島県出身。2003年川崎医科大学（岡山）を卒業。同大付属病院で消化器内科の経験を積み、15年6月に北斗病院の消化器内科に。

超音波内視鏡による検査風景。膵がんの早期発見には、医師と患者が協力し、粘り強く検査を継続することが重要になる